

題目：フィールドにおけるサンクション行動への他者の評価

氏名：宮崎梨奈

指導教官：高橋伸幸

社会的ジレンマを解決する 1 つの方法として、非協力者への罰の導入が挙げられる。しかし罰を行使するにはコストがかかるため、罰を行使するかどうかという二次的なジレンマが生じてしまう (Oliver, 1980)。それにもかかわらず、人々が自発的に罰を行使し、協力が維持されることが先行研究で示されている(e.g., Yamagishi, 1986)。では、なぜ人々は罰を行使するのだろうか。その理由の 1 つとして、罰行使者は良い評判を獲得できるため罰を行使するという評判獲得説がある。これは、実験室実験や質問紙調査では、評判獲得説を肯定するものから否定するものまで様々な結果が得られており、その中にはもう 1 つのサンクションとして報酬の有効性を示すものもある。しかし、フィールド実験で得られているのは Balafoutas, Nikiforakis & Rockenbach (2014) の罰行使者が何もしない人よりも良い扱いを受けることはないという結果のみである。そこで、本研究では Balafoutas らの結果の妥当性と頑健性を検討するために罰と報酬を扱ったフィールド実験を行った。同時に、報酬を扱った条件を設定しサンクションとしての報酬の有効性を検討した。本研究では、ポイ捨てを注意する行為を罰、ゴミ拾いを褒めて飴をあげる行為を報酬として、それらの行為を行う人物が持っている紙袋の中身の小冊子をばらまいてしまった時に人々が助けてくれるかどうかを調査した。統制条件・罰条件・報酬条件を設定し、罰行使者と報酬を与える人が何もしない人と比べて報われるかどうかを検討した。その結果、罰行使者は何もしない人よりも助けてもらえず、報酬を与える人は何もしない人と同程度にしか助けてもらえなかった。Balafoutas らの結果を再現することはできず、結果の妥当性と頑健性を示すには至らなかったが、評判獲得説を否定する実験室実験や質問紙調査の結果をフィールド実験において支持することができたという点では Balafoutas らの結論を支持するものである。また、報酬を与える人が何もしない人よりも助けてもらえることはなく、報酬を与える人が良い評判を得ることも示されなかった。しかしこの結果は、フィールド実験において初めて報酬についての知見を得るという大きな意義があった。本研究の結果は以上であるが、実験中、助けはしないがねぎらいの言葉をかける人がいた。本研究では小冊子を拾うという行為のみをカウントしていたが、ねぎらいの言葉などの言葉による報酬もカウントしていれば結果が変わった可能性もある。